

と疑問を出した時、船は宇和島についた。

私達を物色するウロンな眼は其所、此所に光つて居た。是れが是れ、安寧秩序を維持する所以の機關であるとよ。

五 人間は十人十色である、然かも完全でない、それ故に、行爲の規

準となるべき法律が必要だ。然らざれば世の中は眞暗になる。

人間は十人十色である。其所にアナキズムでなければならぬ所以がある。

もし私達が、十人が十人とも同じやうな考へを持つて居るものとすれば、ほんに世話はあるまい。私達が一個の共通の法則を持つとすればそれに遵はねばなるまい。だが、私達が十人が十人とも大體異なる考へを持つてゐるのだ。それなのに政府の力で皆な一樣に行爲させやうとするから、茲に世の中が間違ひだらけとなるのだ。

この所が肝じんなかなめな所だ。アナキストは名人々の間にこの相違を許容する絶對的の必要を認める。有ゆる進歩發達はこの差別、若しくはこの差別を増加することに依つて生ずるのだ。

最も原始的な生物は極めて微小な球狀の原形質のもので、全體が一樣に出来上つてゐる。稍々進んで核をもつ生物となれば細胞體と核との、二個の異なる部分から成形される。更に進んだ生物になれば、其の組織も複雑になつて、色々な小さな機關若しくは細胞のあつまりで出来上つて居て、其のものどもの間に多少の相違が生じて来る。

尙ほ一層進んだものになると、其の細胞群の或るものは、ある仕事を受け持つことになり、其の目的を遂行するために、細胞はそれ／＼特別な方面に排列されるやうになる。高等の動物になれば、ある細胞群は呼吸器、即ち、肺臓となり、あるものは又血液の循環を司る心臓を組織し、あるものは神経系統を組織する

ことになつてゐる。

動物界でも植物界でも高等になれば高等になるほどそれ等の機關を組織して居る細胞群と細胞群との間に益々大なる差異が出て来るのだ。

このやうに、我々の社會も進歩すれば進歩する程、其の社會を組織してゐる分子（人民）と機關（俱樂部とか、協會、若しくは學校等）とが複雑になつて来るのだ。

我々にして益々進歩發展することを希望するならば我々は人民に十人十色であるべきことを許容しなくてはならない。この點がアナキストと政府主義者との根本的の相違の存在するところなのだ。

政府は何所の政府でも人間をば型にはめやうと努力する。大概な国々に於ては、事實上、文字通りに人民に兵隊でなくば囚人の制服を着させ様とあせてゐる。

殊に我が國の如きは、おぎあと生れて、少し物心がつけば學校にやる。學校では生徒をば一つ型にはめねば止まぬと云ふ意氣組みでやつてゐる。型にはまつた生徒は優等で、型にはまらぬものは落第生となる。落第生たるものは、其の未來が必ず悲惨であるべく折紙をつけられるのだ。學校が既にそうである。他の所は云はずもがなだ。

之に反してアナキストは斯様な傾向を打ち壊して、常に新しい理想、新しい成長、新しい制度文物の發達すべきことを許容する。

斯くてこそ、社會はほんとうの大人物の感化に浴することが出来、ほんとうの良環境の感化を受けることが出来るのだ。

要するに、私達が總て有ゆる事物に對して同意して居るか、但しは恰も同意をしたやうに行爲することを強制さるゝならば、私達は何事に對しても進歩發達することは出来ない。

何事に限らず、誰か不同意である場合に、變更が行はれ、少數者の意見も實行することが出来なくてはならない。斯様なことは政府では出来ることでは決してない。だから有ゆる進歩發達は政府に拘らずに出来たもので、政府や其代辯人達に依りて出来たものでは決してない。

前述のやうに、人間は十人十色である。十人十色であるから『社會的有機體』に對する中央管理局が必要であるとの議論が出て來るのであるが、それはこの次に論ずることにする。たゞ此所では近代科學の發見にかゝわる一例を加へて筆を止める。

何人も動物界にあると同様に植物界にも性關係及び性のローマンスのあることを知つて居る。そして大概の人々は性の發達したのは生殖のためだと速斷するのであるが、研究の結果は、性の現はれない以前に、植物は澤山に生殖を行つたことが證明されたのだ。

其所で、科學は性進化の利益は何んだらうとの疑問にぶつかつて来る。この謎に對する答辯は、『生殖の性的方法は生殖の他の方法で遂行し得られない、變種の増加のため』なることの事實に繋はることが發見されたのだ。

斯様に生殖の性的方法は單なる生殖のためでなく、變種をいやが上にも多くしたいためなること、換言すれば、生物をして益々進化發展させたい爲めであるやうに、人間が十人十色であり、社會組織が千差萬別なる所以は、人類の進化發展を遂げしめる所以であるのだ。そうするには、人間や人間社會を型にはめやうとする政府主義はこの天理に背反するものであつて、之れは絕對自由を認める無政府主義に於て初めて可能なる所以である。

六 社會は有機體である、有機體は其の中央で管理される、それ故に

人間は頭腦に依りて支配され、社會は政府に依りて支配される。

これは屢々、謂はゆる科學的社會主義者に依りて論議さるゝ問題だ。

社會は有機體でないまでも、少くとも有機體に比すべきものだ。だが最も面白いことは、この科學的反對論者は有機體を分類するに當りて、最も重大なる事實を閑却して居る。あらゆる有機體は其の構造に依りて必然的に一個になつて居るものと、これと反對に其の構造は多少單純で、生理學的に——言葉を換へて言へば、其の形體に於てよりは寧ろ其の機能に依りて一緒に拘束されて居るものとの二種に分類される。

假令ば一匹の犬だ。この犬は勿論、一個の有機體だ。其の構造に依りて一個の犬を構成して居るもので、之れを二つに切り放せば、犬は死ぬより外に仕方はない。其の一切れが各一匹の犬になれるものでない。

だが一個の植物を取りて之れを二つに切つて、接ぐなり、挿すなりすれば、完全なる一個の植物として各健康な有機體が出來上るのだ。

社會はこの二者の何れに比すべきものか、之れは云ふまでもなく明かだ。

社會を二分して、其の人民を半分づゝにして、各それに應じた手段方法を以てしたならば、彼等は分かたれた其の舊社會に似た新社會に進歩發展するのだ。

之れについて眞に面白いことは、大は是非共同體に依りて支配される有機體であり、之れに反して植物の場合は決して集中された有機體でない。

だから其の類例を正しく支持する以上は、何人も全く社會に關するアナキストの意見に賛成すべきであつて、決して集中的國家の觀念に賛成すべきものではない。

又次のやうにも見られる。有ゆる有機體に於て、單細胞は其の單位であるやうに、社會に於ては一個人は其の組織體の單位だ。有機體を研究すると、單細胞群を組織し若しくは仲間の細胞と協力するのであるが、それはその地位に押し付けられてそうなつた譯でなく、生きる必要上そうなつた譯だ。

この原理は正しく總ての有機體に對しても支持されなければならない。人間の器官を組織するため一緒に集まつた細胞は、外部の力に依りて、そうさせられて居るのでも、或は何等支配されて居るのでもない。生きるための個々の闘争がそうすることになつたのだ。器官それ自身も又集中されては居ない。只相互依屬の關係にあるのだ。

胃の腑に故障のある場合には、必ず脳味噌に影響を及ぼすことは確かだ。だが併し、それ以上に胃の腑は脳味噌の上に支配も權威も持つては居ない。この逆も又同じことだ。脳味噌は胃の腑が何にかの理由で其義務を遂行して居ないことは絶對的に能く知ることが出来る。だが併し、彼等を支配することも、倒けと命することも出来ない。

各器官が各其の義務を遂行する所以は、丁度各細胞が其の所を取つて、同一目的のために其の機能を運用すると同様に、其の生活目的を履行するために、そ

うするに過ぎないのだ。

こういう風に見ると、人間は種々なる器官（心臓、肺、肺臓等々）の自由聯合の結果としての完全した有機體と見るべきもので、然も各器官は各器官で、等しく單細胞の自由聯合の結果だ。

この類推法を社會に適用すれば、社會の理想的な組織は、自由なる個人個人が彼等の生活の發展上に於て共に自由制度に集まつたものでなくてはならない。そうして其の社會に於ては、自由制度は他の自由制度の上に自然的に相互的な依屬關係にあるべく、然かも、其社會に於ては、何の制度も強権を強要することなく、或は他の制度若しくは一個人の發達で少しでも支配し、若しくは拘束してはならない。

斯様に、社會は單純なる個人から合成的全體に成長すべきもので、集中論者の言ふやうなもの——合成的な中心から單純なる部分に戻る發達——と見るべきものではない。

のではない。

七 社會の進歩には階段がある。先づ社會主義の時代が来て、それから無政府主義の時代が来る。

之れも矢張社會主義者が屢々用ゆる論法だ。社會進歩には階段がある。それに相違はあるまい。だが併し其の階段とは果して何んであるか。それは輕々に論斷は出来まい。

我々が見て以て、階段なりとするものに、非常に無駄な廻道である場合もあるだらう。又一つ所ばかり、行きつ戻りつしてゐるものもあるだらう。或は逆戻りして、遂に滅亡の深淵に飛び込つゝあるものもあるだらう。

要するにそれが進歩の階段であるか、否かは、それが人間の社會性に適合するか、否かに依るべきものだ。

ソヴェットロシアが出来たから、何處も彼處も、其の眞似せねばならぬ理屈はなく、國粹イタリイが現はれたから、日本もそうせねばならぬ道理はあるまい。日本に地震があつたから、何所にも地震がなくては駄目だといふ譯はない。

先づ社會主義の時代が來て、然る後に、無政府主義の時代が來るべしなどといふことは、無意味である計りでなく、實に滑稽の至りである。

社會主義者及び社會民主主義者等は着々と權力集中の爲にのみ努力して居る。彼等は一に權力、二に權力と、只管權力の集中にのみ力めて居る。其の組織も、其の運動も權力の集中でないものはない、と言ふも過言ではない。彼等は其の權力を以て人民を支配しやうと思ふて居る。

權力の集中にあるが故に一致協力と云ふことは藥にたくもない。其のあるが如く見ゆるのは一時のことで、常に小黨分裂、集散離合常のないのは、他の政黨者流と異ることなき彼等だ。

この輩に依りて人類解放の大業の成就さるべき筈がない。

之れに反して、無政府主義者は、自由、平等の社會組織を信じ、中央權力の廢止を主張する。人民彼等自身の自由合意に依る自由社会に出発して、下から上に成長するところの自由社会を期待する。

人の上に人なく、人の下に人はない。平等にして自由なる社会組織を信ずるが故に、彼等の心情は常に、公明正大である。少しの私心もない。謂はゆる俯仰して天地に恥ぢざるもの、之れ彼等の心情である。

斯くてこそ、はじめて眞に人類解放の大事業は成就され、理想社会は完成されるのだ。

八 何のオーケストラもコンダクターが指揮する、社會だつてその通

りだ、だから、政府がなくては駄目だ。

この反對は西洋でも、日本でも能く社會黨の連中が無政府主義に反對するため、用ゐて居るが、實は格別に取り立て、彼れは是れするほどのものでない。只之れに依りて、社會黨の連中が、社會をば政府の指揮棒で、巨細に亘つて取締をしやうとするのが見えて面白い丈けだ。

自由と支配とは大なる相違がある。この反對を提出する人達は、この相違を悟らないことから、政府の支配とコンダクターの指揮棒のコントロールとを一所くたにするのだ。

政府に對する服従の關係と音樂師達がコンダクターの指揮に従ふのは全然意味が違つて居る。前者の關係は命令關係、強制關係であり、後者の關係は自由合意の關係、相互扶助の關係だ。

音樂師は音樂に興味がある。音樂に依りて自分を表現しやうとする、それには他の人々の助力を借りると尙ほ一層に能く表現が出来る。其所で、彼れは他の音

樂師達と協同する。

斯うした次第で音樂師は他の音樂師を利用するが、他の音樂師達も又自分達の意思を表現するために、彼れを利用する。彼等はお互に共通の目的のために利用しあつて居るのだ。そして、音樂師達は色々な調子を合せるために、信號者がなくては面白くないかぬ、其所で、其役目に立つ適當な人をコンダクターとする。

コンダクターも又自分を音樂上に表現したいために、他の人々を利用する。皆お互様なのだ。

だから、協同してやれぬと思ふ時は、何時でもやめられるし、いやだと思へば何時でも其仲間から脱けることも出来る。コンダクターとても同じ様に、其指揮棒をふり捨てることも、皆のものを滅茶苦茶に混亂させることも出来る。

之れに反して、人民が政府に拘束されるのは、共通の目的のために、自由合意で拘束されるのでなく、刑罰で威嚇する法律の為に拘束されるのだ。其からく

りの支持されて居る所以は、人民共の共通の利益だからと云ふ訳でなく、権力と云ふものがあるからだ。政府は人民がいやだと云ふことを強制して行はしめることも出来る。

斯様に違つた仕組を同じもののやうに云ふのは、實に馬鹿氣なことだ。

自由組織に於ては、お互が提議はする。そして其提議の行はれるのは、各個人がその提議に同意するからで、強制のためではない。

九 働かない人があつたら何うするか。

この問題は多くの人々から能く提出される問題だ。之れは人間は社會的動物である、云ふことを念頭において考へれば、すぐ了解が出来る問題だ。

社會は人間よりも先在者で、人間が未だ人間にならない以前から、社會を爲して生活して居た。だから人間と生れれば、必ず社會を爲して生活する。人間は社